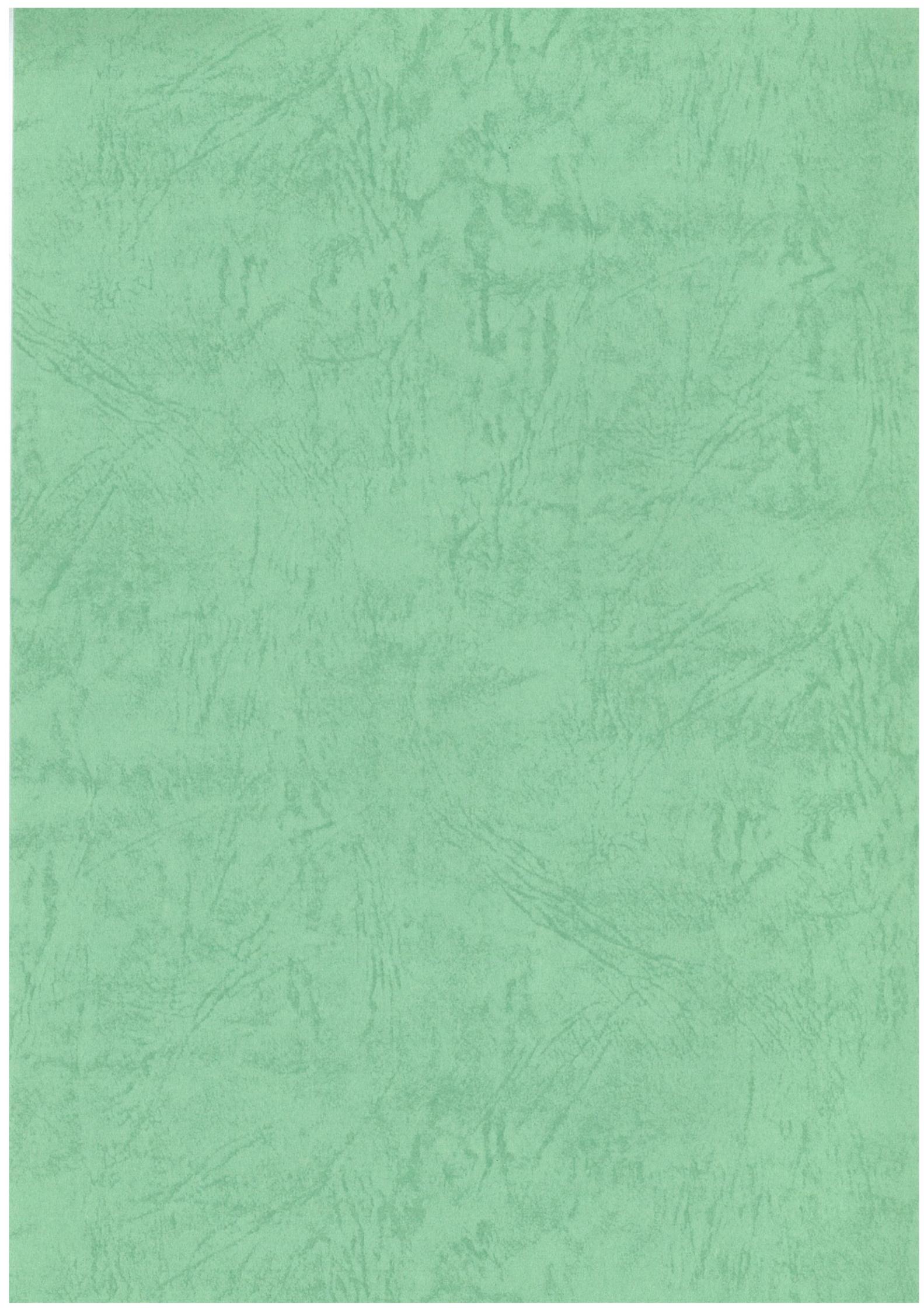


# 綾羅木郷遺跡への招待

下関市立考古博物館



## は じ め に

響灘沿岸の本州西端部は「北浦」と呼び慣わされていて、その西南部に位置する標高8～13mの洪積台地上に綾羅木郷遺跡が広がる。遺跡は1969（昭和44）年にその一部が国の史跡指定を受けて保存され、下関市立考古博物館は、史跡指定地の南側に隣接して1995（平成7）年に開館した。

本遺跡の学問的内容や、保存に至った経緯については『綾羅木郷遺跡I』（下関市教育委員会、1981）や『史跡 綾羅木郷遺跡－下関の古代文化をめぐる－』（郷土の文化財を守る会、1995）などに詳しく記されている。しかしこれらは、綾羅木郷遺跡の概要を知る上で役立つけれども、一般には入手不可能であったり、市販されていても本遺跡を中心にした記述ではないため、来館者が本遺跡を知る上で手頃な冊子をとの要望から本冊子を刊行するに至った次第である。

本遺跡の発掘調査および保存運動には、下関始原文化研究会をはじめとする多くの一般市民や学生、教員がボランティアで参加されたと聞く。当時、遺跡保存か開発優先かで大きな社会問題となり、本遺跡が緊急に史跡指定されて30年以上経過したが、現在も全国各地で繰り返される“古くて新しい命題”を目の当たりにする時、本冊子を手にされた方々が文化財保護の問題に少しでも関心を持っていただければ、これに勝る喜びはない。

平成13年3月31日

下関市立考古博物館

## 目 次

### はじめに

1. 遺跡の位置と歴史的環境	3
2. 遺跡の発見とその保存まで	7
3. 遺跡の概要	12
4. 弥生時代集落としての綾羅木郷遺跡	19

## 凡 例

- 1 本冊子は来館者の便宜を図るため、綾羅木郷遺跡のガイドブックとして作成したものである。
- 2 掲載写真のうち、1～6はグループSY S（新谷照人・吉岡一生・清水恒治の三氏）の提供を受けた。深く感謝申し上げる。
- 3 本冊子は館長の指導のもと、澤下孝信が執筆・編集したが、挿図作成にあたって田中博美の協力を得た。
- 4 本冊子の性格上、本文中で引用文献を明示せず、挿図出典とともに主要参考文献を一括して末尾に付した。諒とされたい。

## 1. 遺跡の位置と歴史的環境

竜王山の東麓を源とする綾羅木川(全長約13km)の堆積作用によって形成された綾羅木平野の北側、鬼ヶ城山と竜王山を含む鬼ヶ城山地から西南西にのびる洪積台地の西端部に綾羅木郷遺跡は位置している(標高8~13m)。その北側には梶栗川の堆積による平野が広がり、西側の海岸線は弧状の砂浜で、縄文時代前期と後期、さらに古墳時代後期と、三度にわたる小海進によると考えられる三条の砂堆列が形成されている。

響灘沿岸の北浦地域では海岸線のすぐ側まで中国山地が迫り、平野の規模はいずれも小さい。このなかでもっとも広い綾羅木平野で東西は約2.8km、南北は約0.8kmほどの広さである(第1図)。

下関市内の遺跡の多くは綾羅木川と梶栗川の流域に分布している(第2図)。以下、比較的内容のわかっている遺跡を中心に時代を追って簡単に見ていく。なお、遺跡名に付した番号は第2図のそれと対応している。

### ・旧石器時代

今のところ、綾羅木郷遺跡(1)や延行条里遺跡(42)、平野東端部の秋根遺跡で発見された斧形石器やナイフ形石器、エンド・スクレイパーなどが確実に後期旧石器時代(約4~1万年前)まで遡る例で、この頃にこの地域で人が生活していたことを示している。なお、中期旧石器時代(約9~4万年前)に作られた斜軸尖頭器に類似した石器が綾羅木郷遺跡で出土していて、この地域で人が生活を開始した時期がさらに遡る可能性がある。

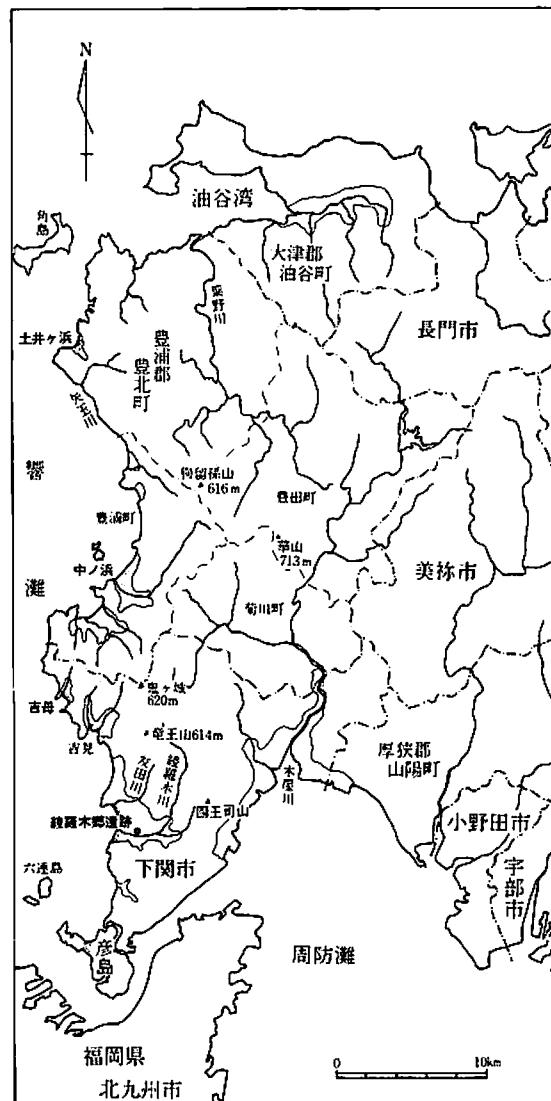
### ・縄文時代

約2万年前にヴュルム氷期(最終氷期)の最寒冷期を迎えた後、次第に暖かくなっていく。やがて、B.C.10000年頃に土器が出現し、それ以降を縄文時代と呼んでいる。草創期(B.C.10000~8000年)、早期(B.C.8000~4000年)と引き続いて温暖化し、年平均気温は、B.C.6000年頃で現在とほぼ同じ、温暖化がピークに達したB.C.4000年頃には現在より約2℃高かったことがわかっている。しかし残念なことに、この地域の草創期・早期の遺跡については不明である。

前期(B.C.4000~3000年)になると、おそらく人口が増加したのだろうが、遺跡数が増えてくる。神田遺跡(11)や梶栗浜遺跡(21)はこの時期の遺跡で、瀬戸内系の刺突列点文土器や九州系の曾畠式土器などが発見されているものの、遺構についてはよくわかっていない。いずれも当時の汀線付近に位置し、後者は砂丘に立地している。さらに、丘陵よりに位置する延行条里遺跡でも前期の突帯文土器(藤B式)が発見されている。

中期(B.C.3000~2000年)の遺跡として神田遺跡と潮待貝塚(20)が挙げられる。瀬戸内系の船元式や九州系の阿高式が発見されているものの、その量は少ない。遺構も不明である。その理由はよくわからないが、山口県内でもこの時期の遺跡は少ない。

後期(B.C.2000~1000年)の前半頃、この地域では小海進があつたらしい。潮待貝塚では洪積段丘面に掘



第1図 響灘沿岸地域地形図(伊東編1981より)

削された断面V字形の溝状遺構(幅80cm、深さ約95cm)が、おそらく海水準の上昇のために、遅くとも後期の初め頃には廃棄され、砂の堆積によって砂堆(低い砂丘)が形成された後の後期中頃に、以前の溝と交差する形で断面逆台形の溝状遺構(上面幅52cm、深さ54cm)が掘削され、貝塚も形成され始めたと考えられている。同貝塚では瀬戸内系の中津式・福田KⅡ式・縁帶文土器、九州系の鐘崎式・北久根山式土器などが発見されている。神田遺跡で確認された土器もほぼ同様だが、ここではその形態や規模が弥生時代のものに近い11基の大型土坑群(貯蔵穴)も確認された。さらにその西側には後期中頃の貝塚を伴っている。

晩期(B.C. 1000~300年)の前半の状況についてはよくわかっていない。晩期でも終わり頃(あるいは弥生早期)の刻目突帶文土器が延行条里遺跡(下層)や秋根遺跡、六連島遺跡で出土している。福岡市板付遺跡で確認された日本最古の水田遺構とほぼ同じ時期にあたる。さらに、水稻耕作と不可分の文化要素である丹塗磨研壺の胴部片も延行条里遺跡で見つかっている。ところで、豊浦町との境に近い御堂遺跡で晩期中頃の9基の木棺墓が、8基の土坑墓と1軒の住居跡とともに発見されている。この木棺墓は板材を箱形に組んだ組合式木棺で、墓坑底部に板材を固定するための溝が掘り込まれている。この掘り込みは弥生時代の木棺墓によく見られるもので、縄文系でないことは注目に値する。

総じてこの地域の縄文時代の状況については不明な点が多い。今後の低地部での発掘調査に期待しよう。  
・弥生時代

前期(B.C. 3 ~ 1世紀)の後半頃、北に開いた馬蹄形を呈する郷台地の上で生活が営まれていた。その跡が綾羅木郷遺跡で、1000基以上の貯蔵穴(貯蔵用竪穴)とこれらを取り囲む環濠があったことがわかっているが、残念なことに、台地上では弥生時代の住居跡は発見されていない。前期末頃に、北部九州や近畿地方でも遺跡数が増加することが知られていて、この地域も同様であったらしい。綾羅木平野の南側の伊倉遺跡(43)や東端の秋根遺跡がこの頃の遺跡である。

ところが、中期(B.C. 1 ~ A.D. 1世紀前半)になると様相が大きく変わる。綾羅木郷遺跡は中期前半にはその規模が急激に縮小し、伊倉遺跡では中期後半には小規模化して、より高い小尾根へと分散化する。その理由の一つとして、中期の小海進が挙げられる。そのピーク時には海水準が現在より約2mも高くなつたようで、この高潮によって従来の耕作地を放棄せざるを得なくなつた結果、遺跡の立地が変化したというわけである。そして後期(A.D. 1世紀後半~3世紀後半)も同様の状況であったらしい。

参考までに他地域の状況を見てみると、北部九州や近畿地方では、とくに中期後半頃に集落間の格差が大きくなり、沖積地や扇状地に大拠点集落が出現するのに対して、岡山県南部地域では拠点集落も丘陵に設けられたと考えられている。ちなみに、北部九州におけるこの時期の代表的な拠点集落である春日市須玖・岡本遺跡は「魏書東夷伝倭人条(魏志倭人伝)」に記された奴国を中心部と想定されている。

一方、墓に目を転じると、箱式石棺から多鈕細文鏡と細形銅劍を出土した梶栗浜遺跡が前期末~中期初頭の遺跡として著名である。当時の海岸の砂丘上に位置している。この頃、北部九州では福岡市の吉武高木遺跡や吉武大石遺跡、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡などで、集団墓でありながら、その一部に青銅器などの副葬品が棺に納められる厚葬墓が出現していたことがわかっており、身分差が存在したものと考えられている。おそらく、梶栗浜遺跡で青銅器を副葬された人もこの地域のリーダーだったのだろう。

ここで、多鈕細文鏡について若干補足しておこう。今のところ、日本列島において多鈕細文鏡は10面発見されているが、そのうち梶栗浜例のように鈕を三つもつものは、佐賀市増田遺跡出土の1面と合わせて計2面である。

中期後半になると、平野を見渡す台地上に墳丘墓が築かれる。稗田地蔵堂遺跡や綾羅木郷台地の西端部にある若宮古墳(3)周辺の墳丘墓がその代表である。稗田地蔵堂遺跡では箱式石棺に前漢鏡1面と金銅製の蓋弓帽2点が副葬されていた。



第2図 綾羅木郷遺跡周辺の地形と遺跡分布 (1 : 20,000) (石田編2000より)  
基図は1994年編集の下関市都市計画図 (1 : 10,000、7-2)

- |                           |                          |                             |
|---------------------------|--------------------------|-----------------------------|
| 1 綾羅木郷遺跡(集落・埋葬跡、弥生時代～中世)  | 17 三太屋敷(館跡、中世)           | 33 仁馬山2号墳(円墳、古墳時代)          |
| 2 上ノ山古墳(前方後円墳、古墳時代)       | 18 万福寺山古墳(円墳、古墳時代)       | 34 仁馬山古墳(前方後円墳、古墳時代)        |
| 3 若宮古墳(前方後円墳、古墳時代)        | 19 七辻古墓(埋葬跡、中世)          | 35 仁馬山3号墳(円墳、古墳時代)          |
| 4 東条遺跡(埋葬跡、中世か)           | 20 潟待貝塚(貝塚、縄文時代)         | 36 上ヶ原古墳(方墳、古墳時代)           |
| 5 安岡駅構内道路(祭祀・製塙跡、奈良時代か)   | 21 梶栗浜遺跡(埋葬跡、縄文時代～弥生時代)  | 37 八幡遺跡(散布地、弥生時代～中世)        |
| 6 上げ安岡遺跡(集落跡、弥生時代)        | 22 梶栗遺跡(集落跡、弥生時代)        | 38 九小山遺跡(集落跡・遺物包含地、弥生時代～中世) |
| 7 蒲生野郷遺跡(遺物包含地、弥生時代か)     | 23 引田遺跡(集落跡、弥生時代)        | 39 みやばし古墳群(円墳群、古墳時代)        |
| 8 横田遺跡(遺物包含地、弥生時代)        | 24 法寂寺古墳群(円墳、古墳時代)       | 40 幸地ヶ森遺跡(集落跡、弥生時代～中世)      |
| 9 墓の下遺跡(遺物包含地)            | 25 打越遺跡(散布地・水田跡、弥生時代～中世) | 41 駅遺跡(集落跡、縄文時代～弥生時代)       |
| 10 宮林山古墳(円墳、古墳時代)         | 26 馬場遺跡(埋葬跡・集落跡、弥生時代～中世) | 42 延行糸里遺跡(集落・耕地跡、弥生時代～現代)   |
| 11 神田遺跡(貝塚・集落跡、縄文時代～平安時代) | 27 重武屋敷遺跡(集落跡、弥生時代～中世)   | 43 伊倉遺跡(集落跡、弥生時代～中世)        |
| 12 富任八幡宮遺跡(埋葬跡、古墳時代)      | 28 駅ノ上遺跡(散布地、古墳時代～中世)    | 44 山の奥遺跡(遺物包含地、弥生時代)        |
| 13 三郎山古墳群(円墳・横穴式石室、古墳時代)  | 29 潟古墳(円墳、古墳時代)          | 45 稲田道祖遺跡(遺物包含地)            |
| 14 王子椎現山古墳(前方後円墳か、古墳時代)   | 30 潟遺跡(集落跡、弥生時代～中世)      | 46 高山遺跡(集落跡、弥生時代)           |
| 15 上有富古墳(遺跡？)(遺物包含地、弥生時代) | 31 延行郷遺跡(埋葬・集落跡、弥生時代～中世) | 47 稲田遺跡(集落跡、弥生時代)           |
| 16 一升坂古墳(円墳、古墳時代)         | 32 奥の屋敷古墳(円墳、古墳時代)       | 48 古屋遺跡(集落跡、古墳時代)           |

蓋弓帽とは、馬車にさしかける傘の骨の先端につける飾り金具で、日本列島での出土は本例のみだが、東京・出光美術館に所蔵されている伝楽浪出土遺物中に同形品がみられる。楽浪郡は、衛氏朝鮮国を滅ぼした前漢(B.C. 202～A.D. 8)の武帝が朝鮮半島を直接支配するためB.C. 108年に設置した四郡のうちの一つで、現在の朝鮮民主主義人民共和国平壤市付近と推定されている。楽浪漢墓では前漢文化の強い影響のもと、B.C. 1世紀後半頃からA.D. 1世紀代まで蓋弓帽が副葬され、その数も石巖里219号墳西室で92点、石巖里9号墳では26点と多い。しかも、これらの墳墓では馬車にともなう道具、車軸頭(車軸の先端につける飾り)や轡(馬を制御する手綱を取り付けるため馬の口にかませる)などの車馬具も副葬されていて、車馬具がセットで納められている点が稗田地蔵堂遺跡の場合と異なる。このことは、日本列島に馬車使用の風習は伝わらず、本来は馬車の道具であった蓋弓帽がその本来の役割を失って、権威を裏付けるための道具(威信財)とみなされていたことを示している。

ところで、ほぼ同時期の佐賀県神埼郡・三養基郡二塚山遺跡や福岡県の前原市三雲遺跡、春日市須玖岡本遺跡、さらには飯塚市立岩遺跡などの北部九州の遺跡では、占有の墓域をもった個人墓が出現したり、特定個人墓に前漢鏡を代表とする副葬品が複数納められるなど、身分の格差がよりはっきりしてくるようになる。前漢鏡も楽浪郡を経由して列島にもたらされたと考えられるが、例えば三雲南小路1号甕棺墓では35面以上、須玖岡本D地点甕棺墓では約27面の前漢鏡が出土したと推定されていて、前者は伊都国、後者は奴国の首長墓とみなされている。鏡の量ではこれらの遺跡に及ばないものの、稗田地蔵堂遺跡の副葬品における前漢鏡と蓋弓帽の組み合わせは、この地域のリーダーの墓にふさわしいものと言えよう。

後期の遺跡立地については今ひとつはっきりしないが、すでに述べたように伊倉遺跡や石原遺跡では中期後半と同様の状況が確認されている。ところが、後期後半代から古墳時代初頭にかけて規模の大きい集落が出現する。秋根遺跡や山陽町との境に近い柳瀬遺跡がそれで、前者では仿製内行花文鏡が土坑墓から出土し、後者では後漢の「長宜子孫」内行花文鏡片が河川跡に近接する土坑で発見された。完鏡と破鏡の使われ方の違いを示すものとして興味深い。なお、後期になると、たとえば後半代の佐賀県基山町千塔山遺跡のように、方形の環濠によって首長層と一般成員の居住空間が明確に区分される例がみられ、首長居館の出現とみなされている。

#### ・古墳時代

この地域では外来系土器の出現によって古墳時代(A.D. 3世紀後半～6世紀)を迎える。秋根遺跡や綾羅木郷遺跡で出土した山陰系土器や近畿系土器、さらには北部九州系の土器がそれである。北部九州・山陽・山陰の結節点としてのこの地域をよく示している。綾羅木川北側の低い台地上に、仁馬山古墳(34)【長さ74m；5世紀初め】、若宮古墳(3)【長さ44.6m；5世紀前半】、上ノ山古墳(2)【推定長約100m；6世紀前半】の3基の前方後円墳が築造され、後期(6世紀代)には上有富古墳(15)、一升塚古墳(16)などの円墳や三郎山古墳群(13)、みやはし古墳群(39)などの群集墳が山麓部や台地上に築かれた。若宮古墳の内部主体には、弥生時代以来この地域で伝統的な箱式石棺を採用しながらも、朝鮮半島の墓制の影響を受けて5世紀初め頃に北部九州で始まる追葬が行われていた。この地域で最大の前方後円墳である上ノ山古墳は現在、川北神社となっているが、六鈴鏡や鈴付釧(腕輪)、三輪玉(太刀の飾り)などが出土している。

この時代の集落として、秋根遺跡や綾羅木郷遺跡、伊倉遺跡、幸地ヶ森遺跡(40)、駅遺跡(41)などが知られていて、伊倉遺跡では、後期に火の見山の北西麓斜面が整地され掘立柱建物群が立っていたらしい。

#### ・古代以降

この地域で内容が比較的よくわかっているのは秋根遺跡であるが、奈良時代(8世紀)の状況ははっきりしない。ただし、近接する伊倉遺跡では奈良時代中頃の生活面の拡張が確認されている。秋根遺跡の平安時代の遺構については、その掘立柱建物の構成から郡家とみなす意見がある。すでに9世紀代にはこの遺跡に中

国陶磁がもたらされており、中国陶磁や国産施釉陶器の量からみても、交通の要衝および物流拠点としての「秋根市」の前身である可能性が高い。なお、平安時代末期には条里地割が完成して、綾羅木川の北側では低湿地を利用しての湿田から乾田へと変化し、現在の地割りにまで継承されている。

中世については、総じて調査例が少なくはっきりしない。守護代の館である三太屋敷(17)、東条遺跡(4)や七辻古墓(19)などの墳墓のほかに、綾羅木郷遺跡、伊倉遺跡、延行郷遺跡(31)などの集落が知られている。

## 2. 遺跡の発見とその保存まで

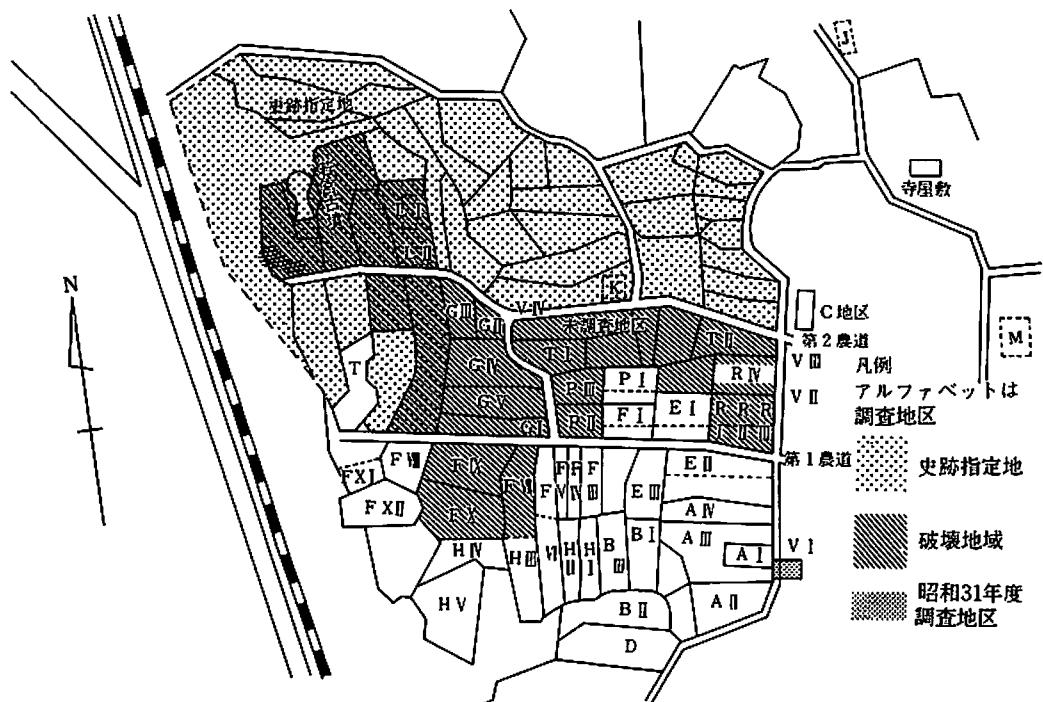
綾羅木郷遺跡が発見されたのは、明治時代のことである。鍵谷徳三郎氏が1898年から1901年までの3年間、山口県豊浦中学校(現 県立豊浦高校)に在職した折り、寺屋敷地区で弥生土器の壺と石斧1点を発見したという(第3図)。これらは後に、長府博物館(現 下関市立長府博物館)に寄贈された。第二次世界大戦中、この台地は軍の要塞として利用されたため、この遺跡の発掘調査が最初に行われたのは1956年のことである。その間、1950年には吉村次郎氏が了元寺西側の切り通しで遺物を採集したことから、この寺屋敷地区を遺跡として確認し、その後も同氏らによって遺跡確認作業が継続された結果、遺跡の範囲が約3万m<sup>2</sup>に及ぶものと推定されるに至った。その他、畑や宅地内で弥生土器や石斧、大型石廬丁などが発見されている。そのうち、頸部途中から上を欠いているものの、底部から胴部にかけてカラムシの繊維が炭化して付着した壺形土器は、現在、京都国立博物館の所有となっている。その後、1965年の6月から7月にかけて二度の発掘調査が行われ、10月からは珪砂採掘に伴う緊急発掘調査が行われることとなった。

珪砂は自動車エンジンの部品などの鋳型の材料として用いられるもので、従来はベトナムのカムラン湾から輸入されていたが、ベトナム戦争の影響で輸入することができなくなった。そうした中、郷台地の下部に良質の珪砂が存在することが確認されたため、採掘権を取得した業者によって、1965年の秋から台地の南側で珪砂の採掘が始まったのである。

1965年10月に始まった調査が進むにつれて、この遺跡の重要性が再認識されるとともに市民の間からも遺跡保存の声が高まり、翌年5月には郷土の文化財を守る会が発足するに至る。しかし、珪砂採掘と緊急調査

綾羅木郷遺跡調査略年表

時 期	地 区 名	備 考
1898～1901	寺屋敷	土器・石斧を発見
1949	〃	土器を発見
1956	岡川家	第1次発掘調査
1958	若宮地区	若宮古墳第1次発掘調査
1959	〃	若宮古墳第2次発掘調査
1965	A I, B I, C地区	第2次発掘調査
〃	寺屋敷, A II, B II, D地区	緊急発掘調査
1966	A III・IV, B III, E I・II・III地区、F I・II, G I地区	〃
1967	H I, E II, F II・III地区	〃
〃	J, K, L, M地区	史跡指定のための遺構確認調査
1968	H II, F IV・V・VI地区, 第1農道、E I, F I, P I・II・III地区	
1969	P II, P III, R I・II・III地区遺跡破壊、T I・II, R IV, H III地区	国史跡に指定
1970	G II・III・IV・V・VI, F VII地区、H IV・V, F VII・IX・X, V II地区	
1971	V I, F XI・XII地区	
1972	V III・IV地区	



第3図 綾羅木郷遺跡略図(伊東編1981より)

が平行して進められるなか、遺跡の保存計画は一進一退を繰り返し、遺跡の破壊が進行したことから、若宮古墳を含めた台地の北側を史跡に指定するための遺構確認調査が1967年の夏に行われた。

その後も遺跡保存と開発のせめぎ合いが続いていたが、1969年3月8日の夜、業者側が史跡指定を防ぐため、突然、11台のブルドーザーを導入して遺跡を破壊し始めた。直ちに現地に駆けつけた調査関係者がブルドーザーの前に立ちはだかり、阻止しようとしたものの、遺跡は大きく破壊され、その被害は保存予定地の一部にまで及んだ。

この事件は全国的に大きく報道され、埋蔵文化財保護の機運を高めたこともある、文化庁でも持ち回り決裁という異例の早さで、3日後の11日には42,533.73m<sup>2</sup>が史跡として指定されたのである。一方、指定地以外の地域ではその後も珪砂の採掘が続けられたため、1972年3月まで緊急調査は継続して行われた。

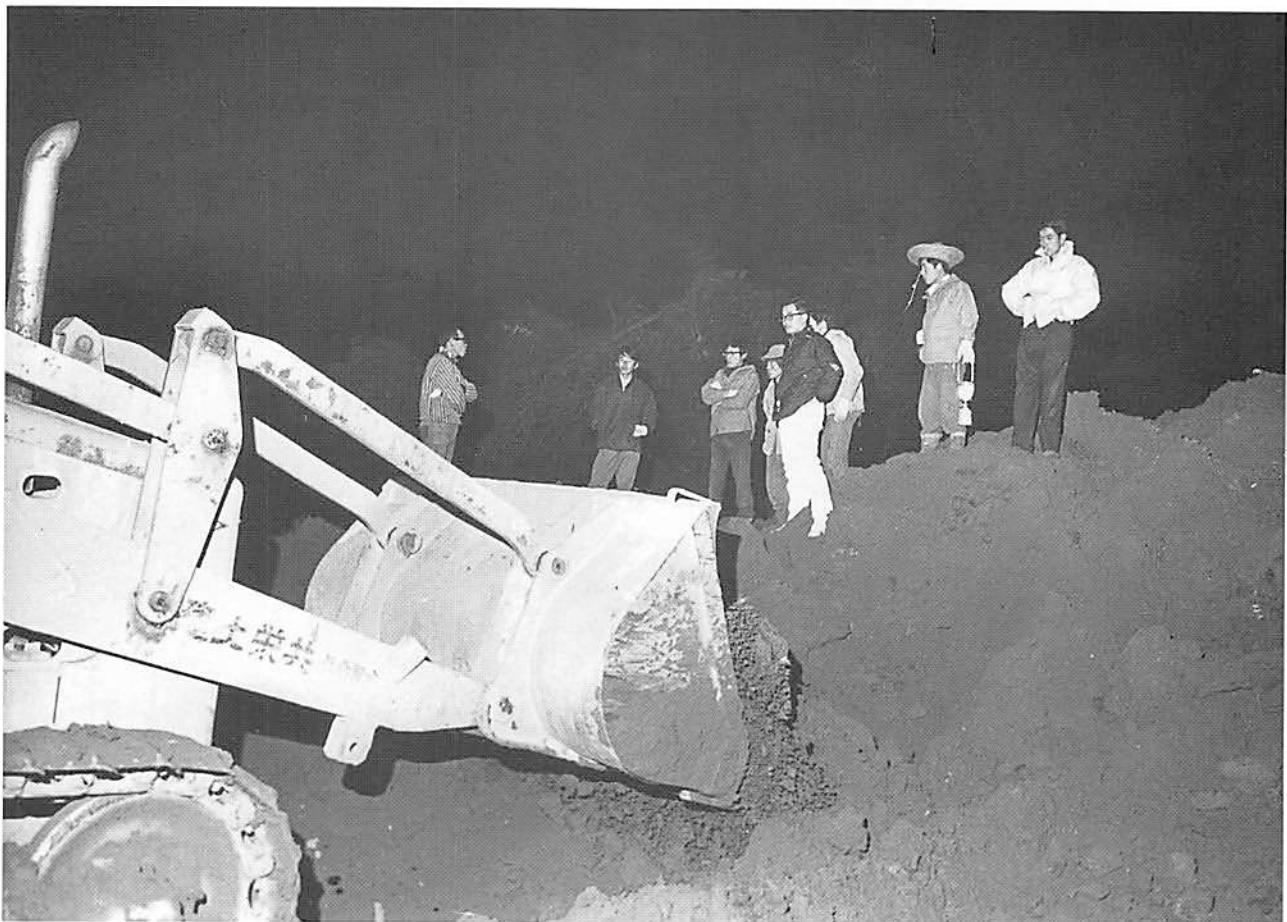
綾羅木郷遺跡の発掘調査と保存運動には、一般市民や教員、学生など実際に多くの人たちがボランティアとして参加し、また間接的にサポートしておられる。なかでも、「下関始原文化研究会」(1962年結成)や「郷土の文化財を守る会」が果たした役割は大きいし、グループSY'S(新谷照人・吉岡一生・清水恒治氏)によって撮影された遺跡破壊時の生々しい写真もこの遺跡の保存運動を後押ししてくれた。この人たちに深く敬意を表したい。

本館の正面ホールに展示している発掘作業風景のジオラマを構成する現代人は、他ならぬこの人たちをモデルにしている。普通の発掘風景のように見えるが、今から30年ほど前に、遺跡保存か開発かの激しいせめぎ合いがあったことに思いをはせていただければ幸いである。

▲写真1 緊急調査の状況(1)



▲写真2 緊急調査の状況(2)

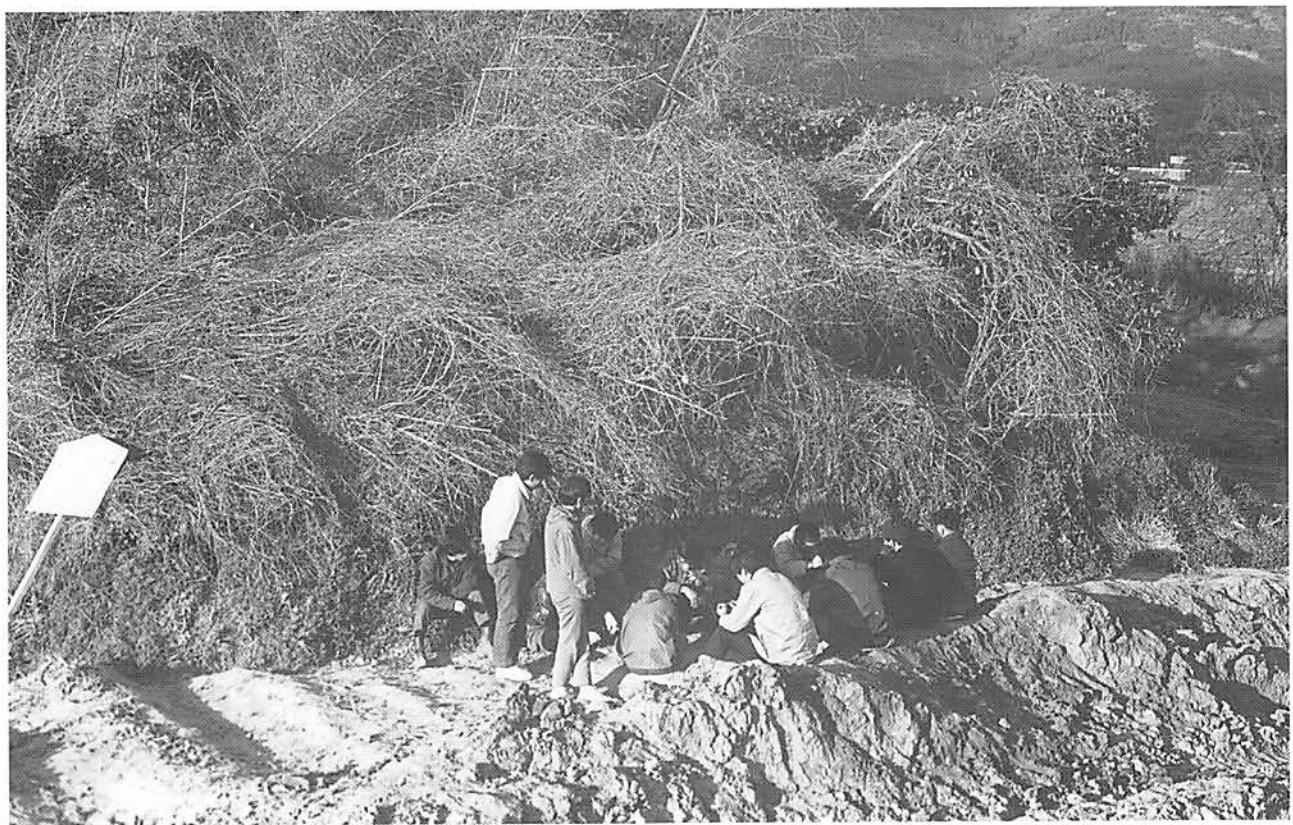
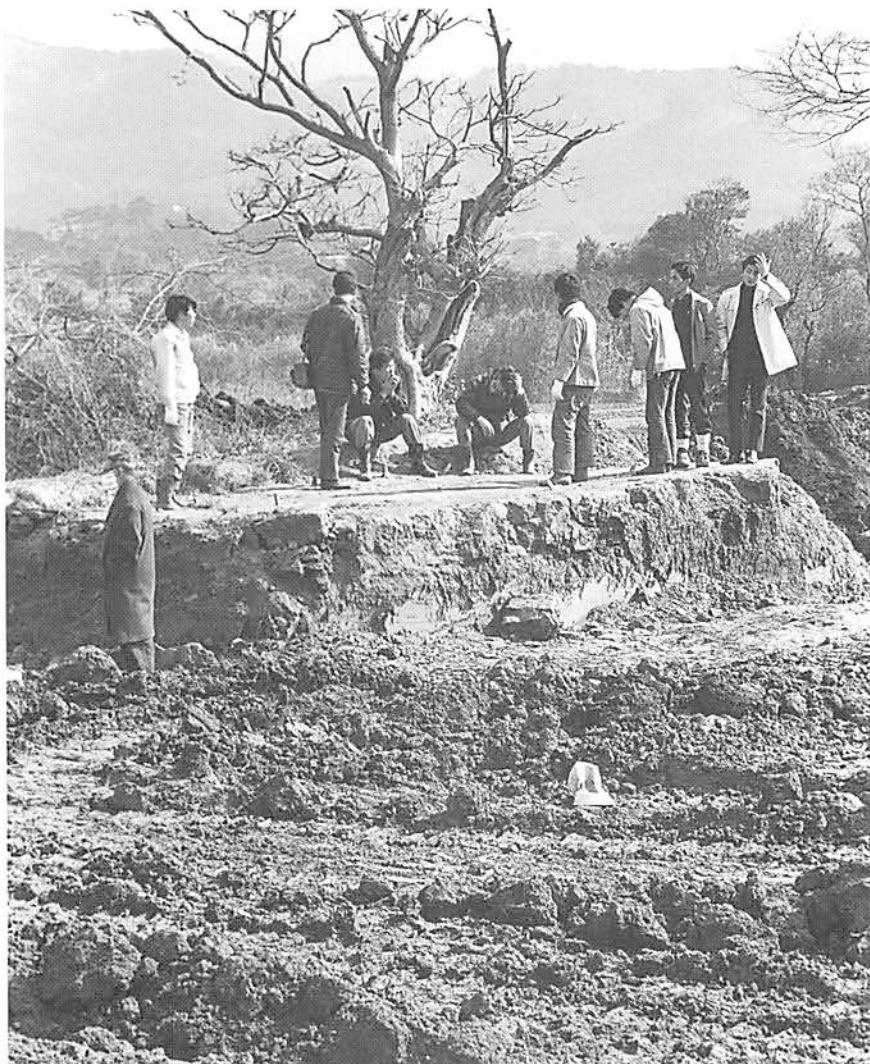


▲写真3 ブルドーザーの前に立ちふさがる発掘調査関係者



▲写真4 破壊された綾羅木郷遺跡(1)

▲写真5 破壊された綾羅木郷遺跡(2)

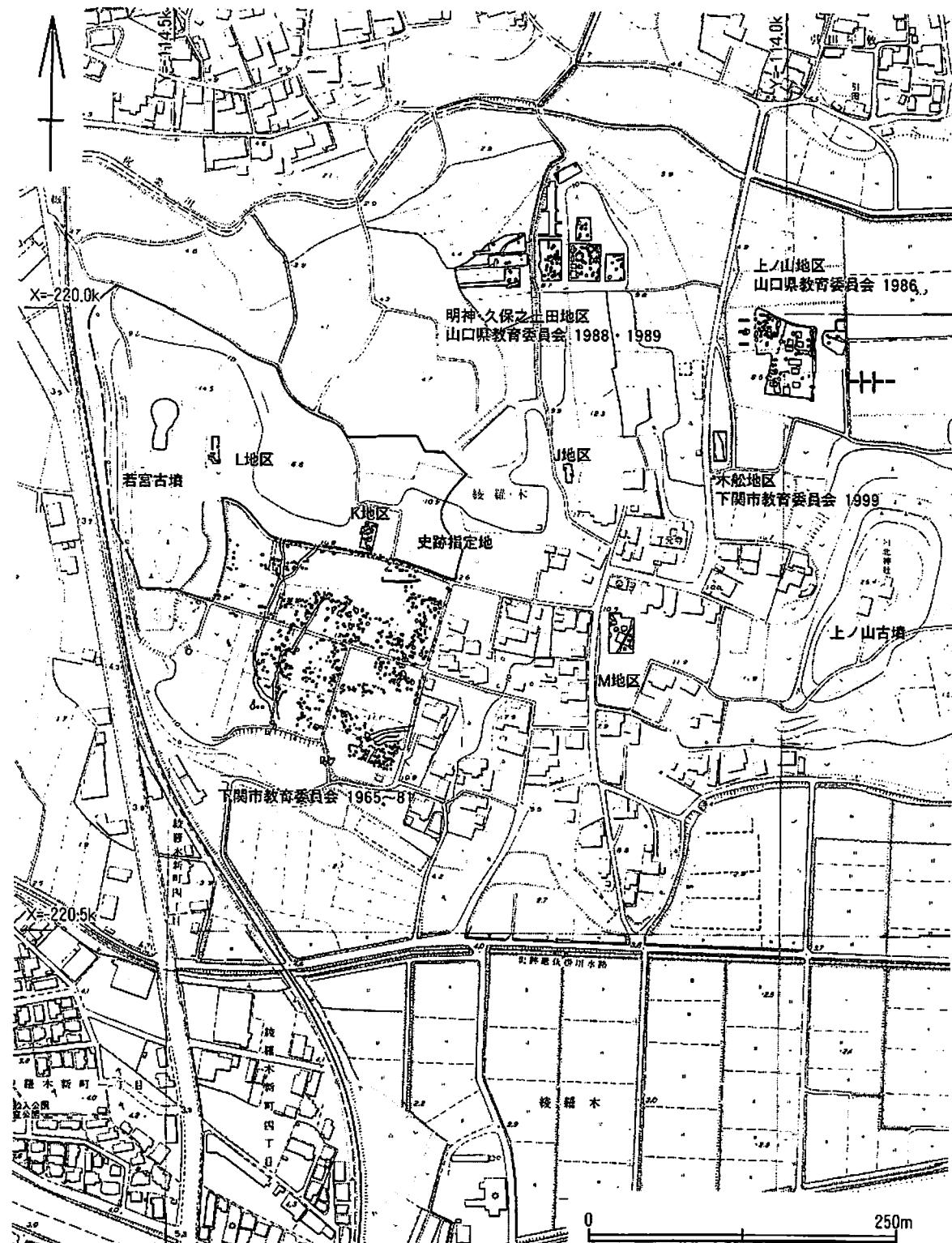


▲写真6 破壊された綾羅木郷遺跡(3)

### 3. 遺跡の概要

史跡指定後に行われた明神・久保之上田地区や上ノ山地区などの発掘調査の成果もふまえて概観しよう(第4図)。

旧石器時代については第1章で述べたのでそれに譲るとして、その後、この台地上で人が生活を営むのは弥生時代前期中頃以降のことである。そして、中期中頃にいったん利用されなくなる。ちなみに、今のところ縄文時代の遺物・遺構は確認されていないが、1960年代の緊急発掘調査時に出土した膨大な遺物のすべて



第4図 綾羅木郷遺跡発掘調査区(1:5,000)(石田編2000より)



▲写真7 A II地区 遺構検出状況(東から)



▲写真8 K地区 遺構検出状況(南から)

が報告されたわけではなく、現在、本館で未報告分について継続的に整理を進めている。順次、その成果を公表していく予定だが、本当にこの台地が縄文時代に生活空間として利用されなかったかどうかは、整理終了を待って判断したい。

さて、弥生時代前期中頃の遺構として、まず溝が挙げられる。断面がV字状で、幅が2m以上、深さが場所によっては3mにも及ぶような大きな溝が、石仏・岡地区(史跡指定地の南側)で確認されている。貯蔵穴群を取り囲むように掘削された溝は、時期が新しくなるにつれて外側に掘り直されていたらしく、同時期に2~3本の溝があったわけではない。一方、明神・久保之上田地区と上ノ山地区でも前期後半頃の溝と貯蔵穴群が発見されていて、前者の場合は調査区の北西部で弧状の溝が、後者では調査区の東端を南北に走る溝が確認されている。

しかし残念なことに、石仏・岡地区をみても、もっとも西側の溝が北にどこまで延びるのか、東側で溝はどうなっているのか、さらに、西から延びる溝と東からの溝が南側でつながっていたのかどうかなど、不明な点が多い。また、台地の北東縁の小さな谷部(木船地区)でも、南北に走る前期末頃の溝が確認されている。この溝と他地区で検出された溝との関係も問題となるが、調査された範囲が限られていることもある。現状では、溝で区画された生活空間の全容を解明することは至難の業である。

ところで、各発掘調査区で溝や貯蔵穴、土坑などの弥生時代の遺構が確認されているにもかかわらず、同時代の住居跡が発見されていないことは興味深い。その理由として、本来この台地上に住居が存在したが、台地が削平されたためにその痕跡もなくなったと考えることができるし、あるいは、この台地は貯蔵空間で、居住空間は別の所にあったと推測することも可能である。いずれにせよ、この問題については、次章で検討したい。

次に、弥生時代の遺物について概観しよう。溝や貯蔵穴から、甕・壺・高坏などの日常土器とともに、磨製石庵丁・石鎌(収穫具)や扁平片刃石斧・抉入片刃石斧・鑿形石斧(加工具)、磨製石斧(伐採用)、石劍・石戈(武器形石製品)、石鏸などの石器が発見されている。そして、鉄斧やその材料としての鉄板、ヤリガンナなどの鉄器も少量ながら出土した。

また、コメやムギなどの穀類、イチイガシやスダジイ、モモ、ウメ、クリなどの種子が炭化した状態で発見されているし、アワやキビが栽培された可能性もあるという。さらに、カモ類の他、イノシシやニホンジカ、ニホンアシカ、タヌキ、ニホンザル、クジラなどの動物の骨、マダイやキヂヌといった魚類の骨、ヤマトシジミやハマグリ、サザエなどの貝殻に加えてウニの棘なども見つかっている。これらが当時の食料だったのだろう。そして、海生動物を捕獲するための道具である土製や石製の漁網錘、ヤスなどの獸骨製刺突具、さらに鯨骨製アワビオコシも出土したことからも、海産資源を積極的に利用していたことがうかがえる。

その他、装身具として、翡翠やアマゾナイト製のペンダント、イノシシの歯を加工したペンダント、碧玉製管玉などが発見されている。

興味深いのは、祭祀と関連するであろう特異な遺物である。男性器と女性器をシンボル化した石製品や人面土製品、土笛(陶埙)などがあり、なかでも土笛は日本列島での最初の発見例ということもある。その系譜に関心が集まっている。その形が中国の殷代に盛行した卵形の土笛に類似するところから、殷の土笛の流れを汲むものと理解され、中国での呼び名である「陶埙」と名付けられた。その後の調査で出土した分を含めて、本遺跡では7点の土笛が発見されている。今のところ、土笛は京都府から福岡県にかけての日本海沿岸部を中心に分布している。大部分が弥生時代前期に属することがわかっている。島根県下での出土例が最も多い。ただ、最近の中国での研究によれば、周代の遺跡から出土した陶埙の数量は殷代に比べてはるかに少なく、綾羅木郷遺跡の時代に並行する前漢代になると、同様の形をした陶埙はみられないという。一方、最近、長崎県壱岐・原の辻遺跡で卵形をしたココヤシ製の笛が出土している。その時期が弥生時代中期であることか

写真9 VI地区溝(L.N.5717)断面(西から)



6002



▲写真10 VI地区 溝(L.N.6002)断面(南から)

►写真11  
VIII地区貯蔵用竪穴(L.N.6017)遺物出土状況(南から)



ら、本来、何か植物性の素材で作られていた笛を粘土で作るようになったのが、日本列島での卵形の土笛の起源とする意見もある。

弥生時代中期中頃以降この台地は利用されなくなり、次に確認されるのは、古墳時代中期（5世紀代）の後半頃の竪穴住居跡である。石仏・岡地区の南辺部で1基確認されていて、これは竈が備え付けられている。さらに、各発掘地区で確認された古墳時代後期（6世紀）、あるいはその時期の可能性がある遺構として、竪穴住居跡6基、掘立柱建物6棟が挙げられる。この時代の遺物に、土師器、須恵器の他に、鉄鎌や滑石製ミニチュア製品がある。ちなみに、台地の西端にある若宮古墳は5世紀前半代、東側の上ノ山古墳は6世紀前半代に築かれた。

平安時代から鎌倉・室町時代にかけての遺構も見つかっている。掘立柱建物、土坑、木棺墓や火葬墓などがそれで、土師器や須恵器、瓦器、中国製を含む陶磁器が伴なって出土した。

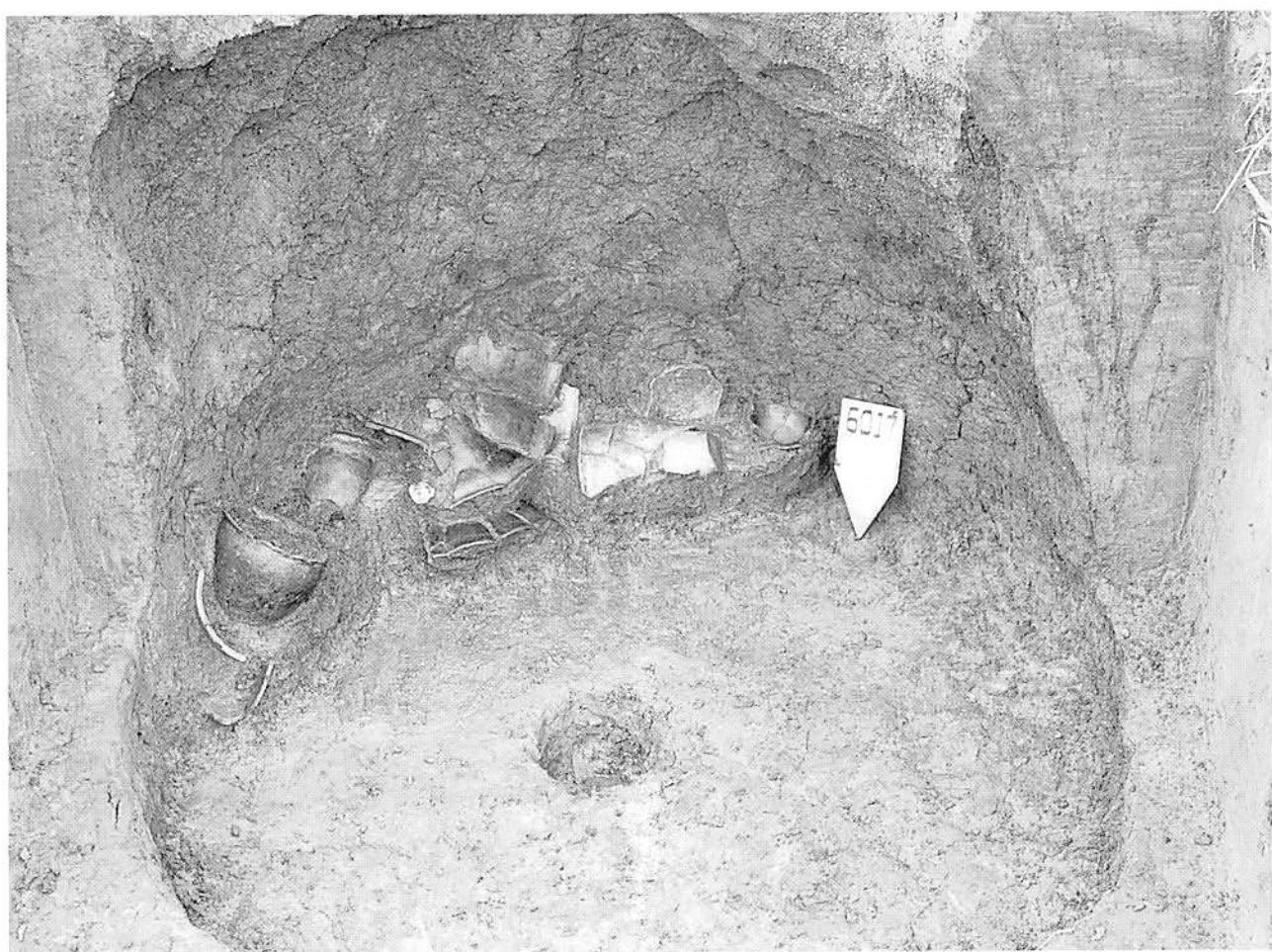
なお、本遺跡出土の弥生時代遺物は一括で山口県指定文化財として登録され、現在本館が保管し、その一部を展示している。



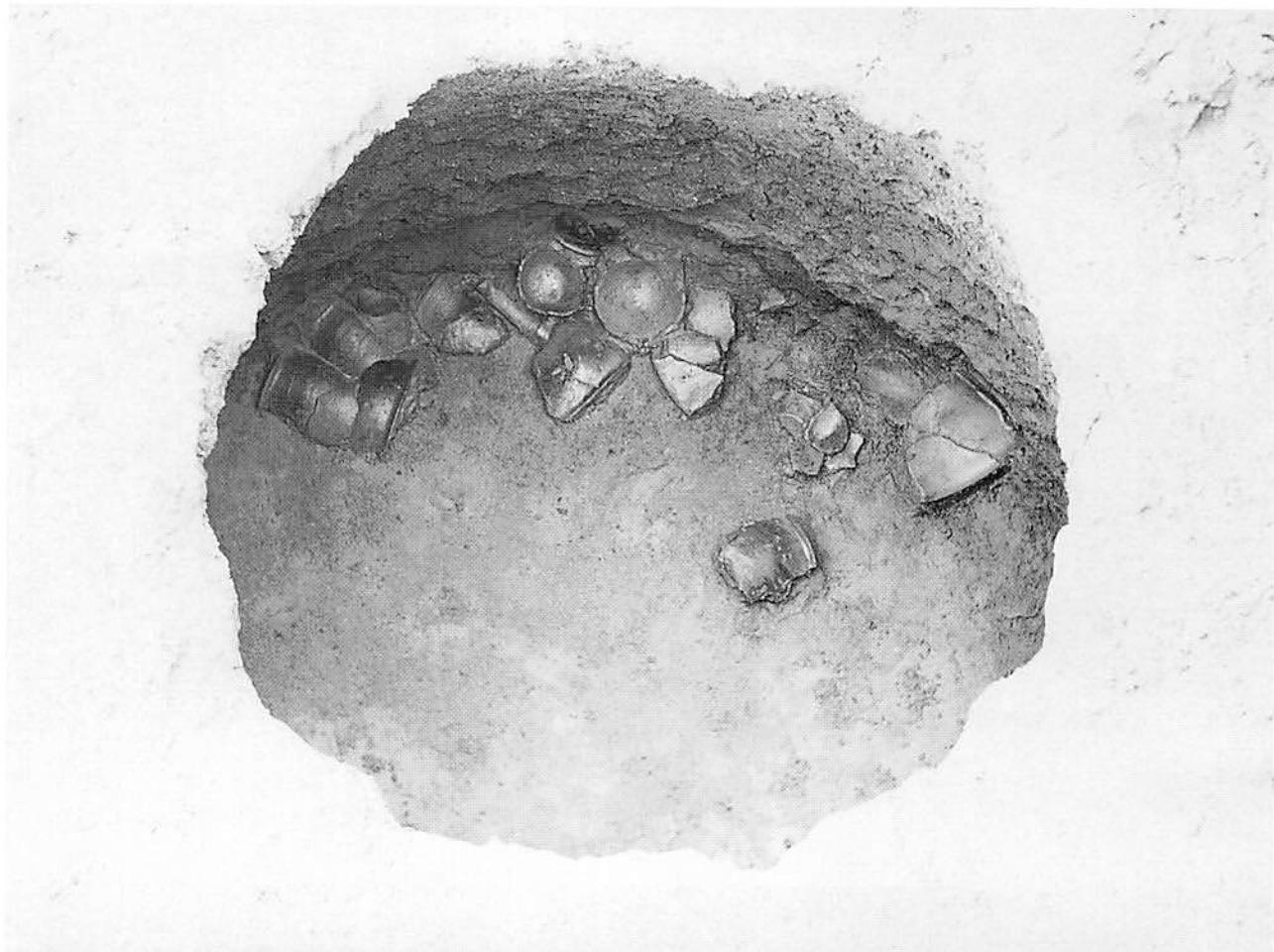
▲写真12 A III地区 貯蔵用竪穴(L. N. 60)遺物出土状況



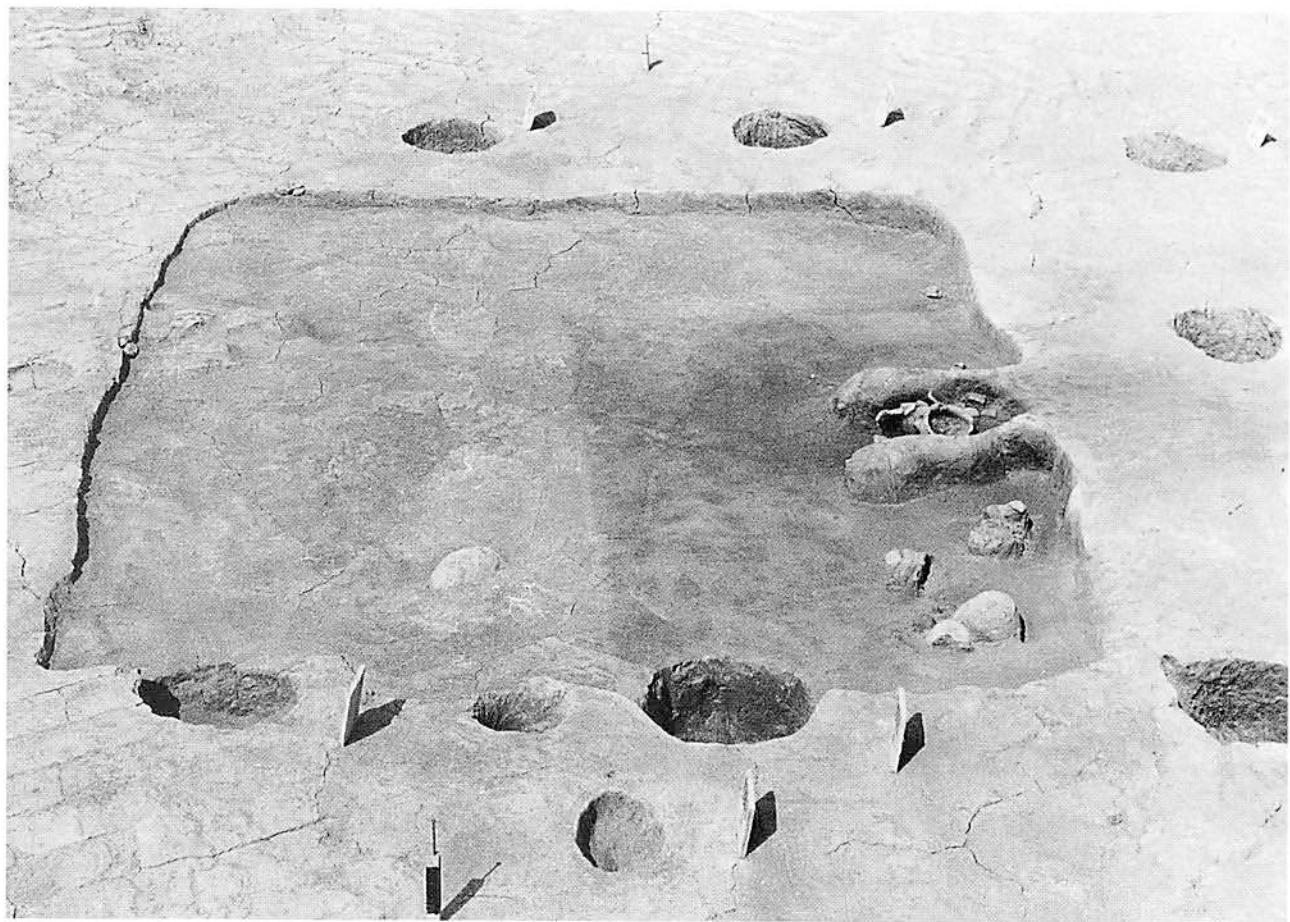
▲写真13 E III地区 貯蔵用竪穴(L. N. 34)  
土笛出土状況



▲写真14 V III地区 貯蔵用竪穴(L. N. 6017)遺物出土状況(南から)



▲写真15 E I 地区 貯蔵用竪穴(L.N. 4827)遺物出土状況(南から)



▲写真16 F XI 地区 古墳時代竪穴住居跡(東から)

## 4. 弥生時代集落としての綾羅木郷遺跡

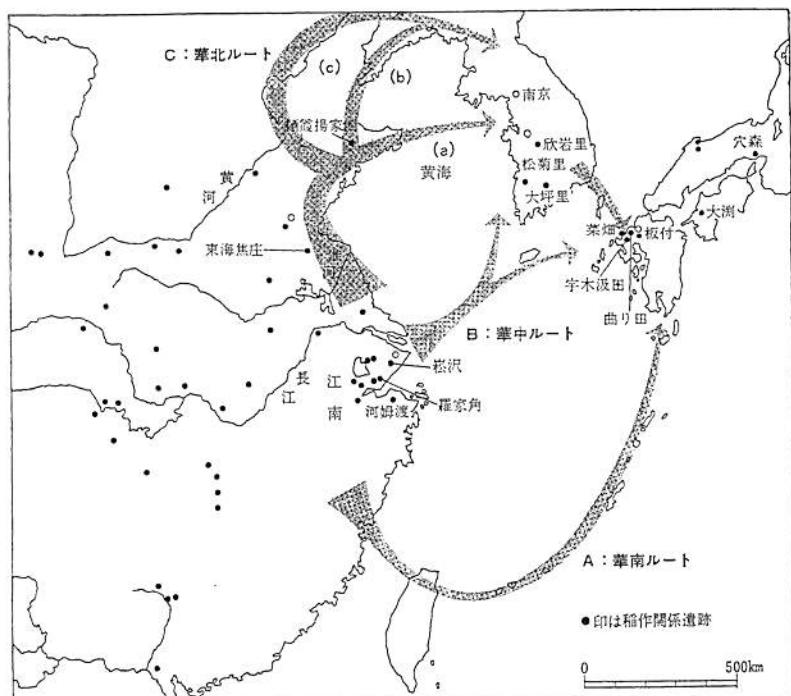
### 4-1 稲の来た道

日本で最古の水田遺構が確認されたのは福岡市板付遺跡で、その時期はB.C. 4世紀頃(縄文時代晚期後葉あるいは弥生時代早期)である。

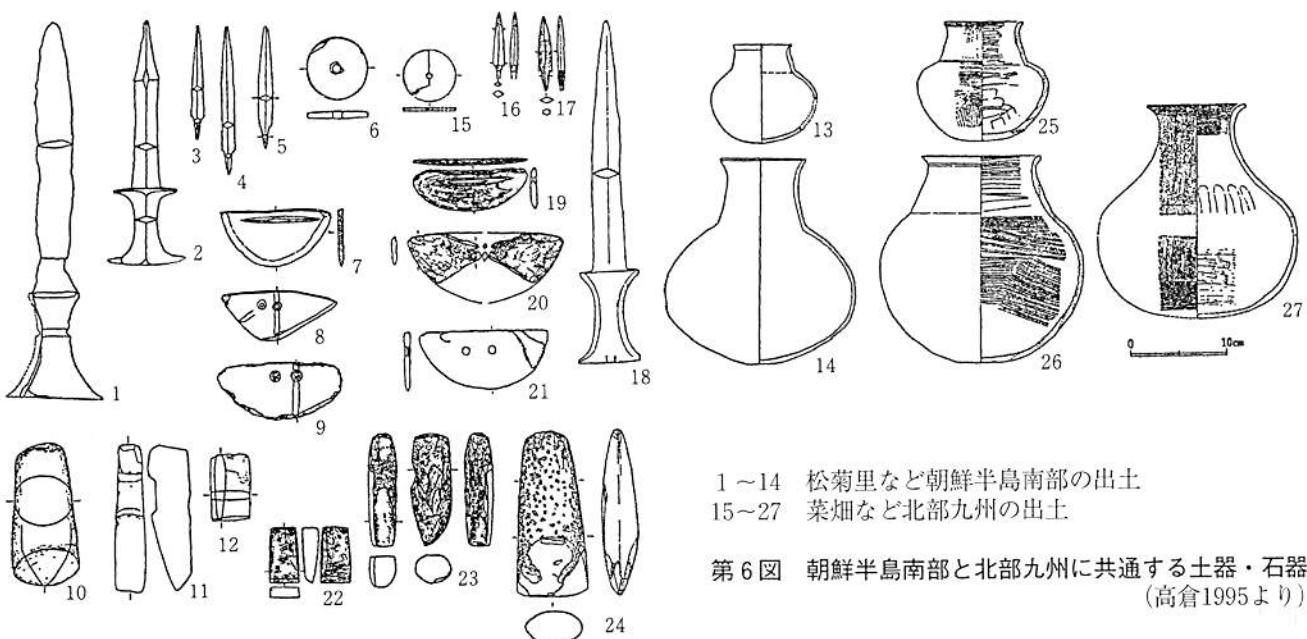
日本への稲の伝播ルートについては、華北(北方)、華中(江南)、そして華南(南方)の3つのルートが想定されている(第5図)。その各々についていくつかの意見があるものの、日本の稻作受容期に朝鮮半島南部と共に土器や石器(第6図)、支石墓や環濠(溝)集落などがみられることから、朝鮮半島経由で伝來した可能性がもっとも高い。また、この時期の日本出土炭化米は短粒型(ヤボニカ)に限られ、韓国忠清南道松菊里遺跡(B.C. 5~4世紀)出土の炭化米と酷似することも示唆的である。

ただし、これ以前にも朝鮮半島南部の影響があったことを示す資料がある。たとえば、北九州市貫川遺跡で縄文時代晚期中頃(B.C. 5世紀頃)の層から出土した磨製石庖丁と孔列文土器がそれで、この磨製石庖丁の形態は朝鮮半島の孔列文土器の時期に多くみられる。孔列文土器とは朝鮮半島の前・中期無文土器時代(B.C. 8~5世紀頃)の土器で、口縁部に沿って連続して穴があけられている。日本では、その影響を受けた土器が縄文時代晚期中頃から弥生時代初頭(B.C. 5~3世紀頃)にかけて出現し、南部・北部九州から島根県、岡山県にかけて分布している。

ところで、ヤボニカには温帯型と熱帯型の2種類があり、現在の民族例をみても、前者は水田で、後者



第5図 稲の伝播ルート(高倉1995より)



1~14 松菊里など朝鮮半島南部の出土  
15~27 菜畑など北部九州の出土

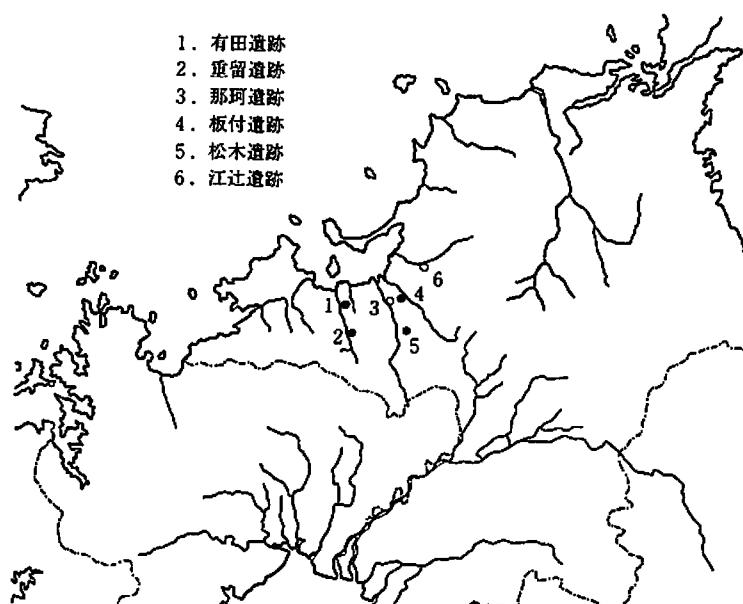
第6図 朝鮮半島南部と北部九州に共通する土器・石器  
(高倉1995より)

は焼畑で栽培される。そして、熱帯ジャポニカを水田で栽培し続けても温帯ジャポニカには変化しないという。当然のように、弥生時代の米は温帯ジャポニカと考えられてきたが、最近DNA分析によって、たとえば中期後半の滋賀県守山市下之郷遺跡(B.C. 1世紀後半頃)出土の炭化米に熱帯ジャポニカも含まれることが明らかになった。一方、宮崎県えびの市桑田遺跡の縄文時代晚期の土層で検出されたイネのプラント・オ・パール(イネ科植物の葉に含まれる珪酸体というガラス質の細胞が微化石になったもの)も熱帯ジャポニカの可能性が高いとされ、これらを理由に、水稻耕作に先立って南方ルートで伝來した稻による焼畑が行われていたとする意見がある。ともあれ、朝鮮半島南部で出土した米のDNA分析ができれば、そして、そこに熱帯ジャポニカが含まれるか否かを確認できれば、新たな議論が可能となろう。

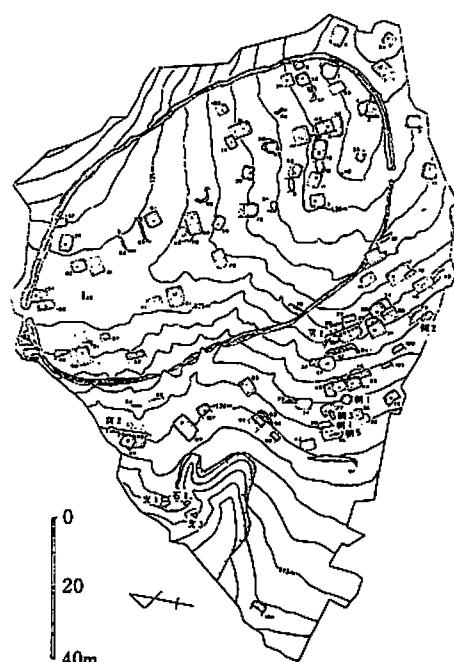
北部九州で受容された水稻耕作は短時間のうちに受け入れられたよう、水田遺構こそ発見されていないものの、磨製石庖丁や磨製石鎌といった収穫具が出土した愛媛県松山市大淵遺跡、板付遺跡と同様の木製農具(鋤・鋤)が発見された香川県高松市林・坊城遺跡などでは、板付遺跡とほぼ同じ頃に水稻耕作が開始されていた可能性が高い。また、宮崎県都城市坂元A遺跡や岡山市津島江道遺跡で発見された水田跡がこの時期に遡る可能性も指摘されている。下関市内でも、この時期の甕や壺が断片的ながら確認されているから、近い将来、水田遺構が見つかるかもしれない。

#### 4-2 環濠(溝)集落概説

綾羅木郷遺跡より遡ること約300年、縄文時代晚期後葉～弥生時代初頭(B.C. 4～3世紀頃)にかけて、北部九州に居住区を環濠で囲んだ集落が出現する(第7図)。そのうち、福岡市那珂遺跡では晚期後葉に二重の環濠が巡らされていた。調査面積が限られているため、環濠で取り囲まれた内部の遺構は不明だが、外側の濠は直径150mほどの円形に復元され、その断面はV字形である。外濠の規模は幅6～7m、深さ4m、内濠は幅3.5m、深さ2.3～2.5mと推定されている。ところで、このような集落構造は縄文時代の集落の系譜を引くものではなく、その源流は中国・陝西省の半坡遺跡(B.C. 4800～3900年頃)や同じく姜寨遺跡(B.C. 4000年頃)など、アワを主要作物としていた中国の新石器時代の遺跡に求められる。しかし、日本における初期の環濠集落とは年代的な開きが大きいため、その直接の祖型として韓国慶尚南道検丹里遺跡(B.C. 6～5世紀)など朝鮮半島の環濠集落をあてる説が有力である(第8図)。検丹里遺跡の場合、断面V字形の環濠



第7図 縄文時代晚期後葉～弥生時代初頭の環濠集落  
(白ヌキは晚期後葉)



第8図 植丹里遺跡(鄭・安1990より)

が丘陵頂部から斜面にかけて広がり、長径119m、短径70m、その内部面積は約6000m<sup>2</sup>である。環濠の内外から93基の竪穴住居跡が発見されたが、貯蔵施設は確認されていない。

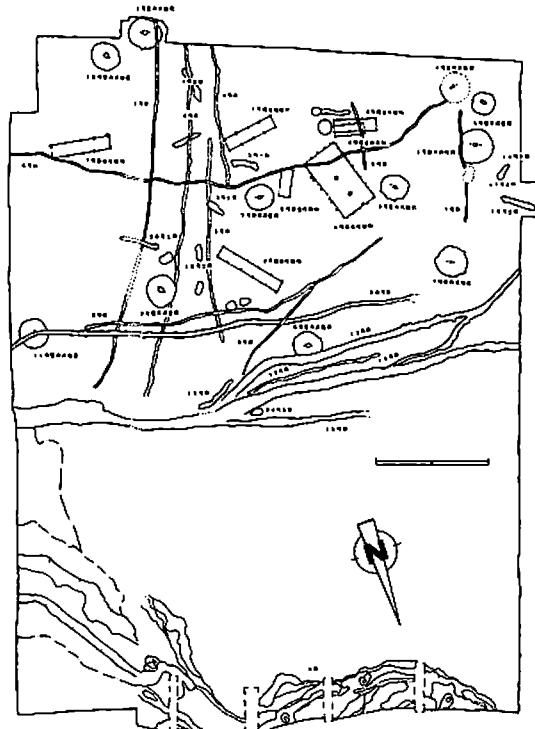
一方、同じく晩期後葉の福岡県粕屋町江辻遺跡では環濠の内側で円形竪穴住居跡9基、掘立柱倉庫建物跡5棟などが発見された。住居が環状に配置され、さらにその内側にも住居と掘立柱倉庫が建てられているが(第9図)、この遺跡で確認された竪穴住居が、すべて縄文時代とは系譜を異にする松菊里型住居であることは注目に値する。松菊里型住居とは韓国忠清南道松菊里遺跡で発掘された住居を指標とし、円形の平面プランで、床の中央部に設けられた楕円形土坑の両端に主柱穴がみられるものである。

やや時期が下り、弥生時代初頭～前期前半代の環濠集落として、福岡市重留遺跡が挙げられる。ここでは長さ150m以上に及ぶ環濠が巡らされ、環濠の外側で竪穴住居跡9基と墓地および貯蔵穴が、内側で竪穴住居跡7基が確認されている。また、ほぼ同時期の福岡市板付遺跡では低台上のほぼ中央に110m×80mの環濠、さらにその外側にも370m×170mの環濠が存在し、それぞれの環濠内外で貯蔵穴や井戸が確認されている。住居は内側の環濠内にあったとする意見もあるが、残念ながらよくわかっていない(第10図)。

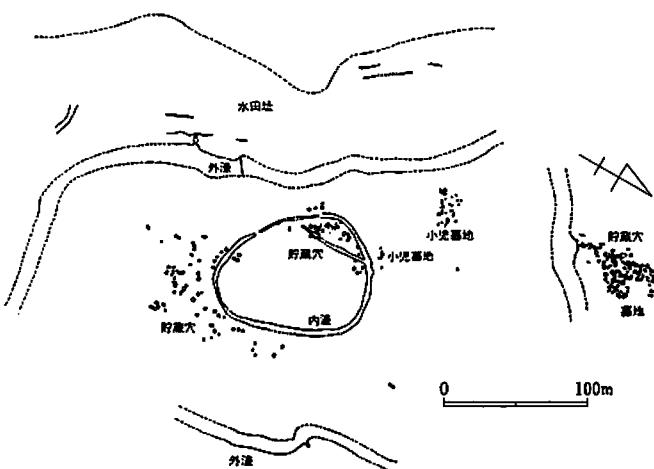
前期中頃から後半にかけて、北部九州以外の地域でも環濠集落が出現する。綾羅木郷遺跡や広島県亀山遺跡、兵庫県大開遺跡、京都府扇谷遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、愛知県高蔵遺跡などがそれで、中国～東海地方にかけて分布し、さらに群馬県注連引原遺跡も前期後半の環濠集落である。その全容が判明している遺跡は多くないが、この時期には貯蔵穴群を囲む“貯蔵穴管理用”環濠が確実に存在する。亀山遺跡や扇谷遺跡、福岡県の葛川遺跡、光岡長尾遺跡、三沢北中尾遺跡などでは、環濠の内側で貯蔵穴は発見されているものの、住居跡は確認されていない。居住区は別の場所にあったものと推定されている。

綾羅木郷遺跡でも弥生時代の住居跡は未発見である。当時の地表面が削られたため住居跡が消滅したとする意見もあるが、古墳時代の住居跡が確認されていることを考えると、この遺跡の環濠は貯蔵穴管理用であった可能性が高い。

弥生時代の中期以降、西日本では大規模な環濠集落が各地域の拠点的集落となる。那珂遺跡や板付遺跡、唐古・鍵遺跡、大阪府池上曾根遺跡などが前期以来の拠点的集落として継続する一方、中期前半頃、綾羅木郷遺跡は歴史の表舞台からいったん姿を消すのである。



第9図 江辻遺跡第2地点主要遺構配置図  
(九州縄文研究会2000より)



第10図 板付ムラの構造(高倉1995より)

## 挿図出典および主要参考文献

- 石田陽子編 2000『綾羅木郷遺跡－木船地区－』下関市教育委員会  
伊東照雄・山内紀嗣編 1977『秋根遺跡』下関市教育委員会  
伊東照雄編 1981『綾羅木郷遺跡 I』下関市教育委員会  
伊東照雄 1998『綾羅木郷台地遺跡』『研究紀要』第2号 下関市立考古博物館  
伊東照雄・澤下孝信 1999『第47次綾羅木郷遺跡(木船地区)発掘調査報告』『研究紀要』第3号 下関市立考古博物館  
岩崎仁志・大村秀典編 1986『綾羅木郷台地遺跡(上ノ山地区)』(財)山口県教育財団・山口県教育委員会  
大阪府立弥生文化博物館編 1993『弥生人の見た染浪文化』  
大塚初重ほか 1998『弥生時代の考古学－シンポジウム日本の考古学3－』学生社  
小田富士雄 1987『初期筑紫王権形成史論』『東アジアの考古と歴史 中』六興出版  
小田富士雄・韓炳三編 1991『日韓交渉の考古学－弥生時代篇－』六興出版  
小野忠熙 1985『山口県の考古学』吉川弘文館  
片岡宏二 1998『日本出土の前・中期無文土器』『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会  
金関 惣 1961『若宮古墳』『山口県文化財概要』第4集 山口県教育委員会  
金関 惣 1971『稗田地蔵堂発見の蓋弓帽』『下関文化』第1号 下関市文化協会  
金関 惣・大阪府立弥生文化博物館編 1995『弥生文化の成立』角川書店  
九州縄文研究会 2000『九州の縄文住居』  
郷土の文化財を守る会 1995『史跡 綾羅木郷遺跡』  
久米庸孝 1977『気候の変動』『古代の地方史 7』朝倉書店  
考古学研究会 1999『論争吉備 シンポジウム記録1』  
佐藤洋一郎 1996『DNAが語る稻作文明』日本放送出版協会  
佐藤洋一郎 1999『DNA考古学』東洋書店  
澤下孝信編 1998『下関の弥生時代－近年の発掘成果から－』下関市立考古博物館  
澤下孝信 1999『付編 第46次綾羅木郷遺跡(宝前地区)発掘調査報告』『研究紀要』第3号 下関市立考古博物館  
澤下孝信 2000『下関市域出土資料の研究1－下関市潮待貝塚の遺物1－』『研究紀要』第4号 下関市立考古博物館  
澤下孝信編 2000『倭人、文字と出会う』下関市立考古博物館  
下條信行 1986『弥生時代の九州』『岩波講座 日本考古学5』岩波書店  
下関市立考古博物館 1995『綾羅木郷遺跡の歴史展』  
高久健二 1995『染浪古墳文化研究』学研文化社  
高倉洋彰 1995『金印国家群の時代』青木書店  
都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店  
武末純一 1998『日本の環溝(濠)集落－北部九州の弥生早・前期を中心に－』『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会  
鄭澄元・安在皓 1990『蔚州検丹里遺跡』『考古学研究』第146号 考古学研究会  
西岡義貴編 1989『綾羅木郷台地遺跡(明神地区・久保之上田地区)』(財)山口県教育財団・山口県教育委員会  
乗安和二三編 1988『綾羅木郷台地遺跡(明神地区)』(財)山口県教育財団・山口県教育委員会  
藤原宏志 1998『稻作の起源を探る』岩波書店  
前田義人・武末純一 1994『北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庵丁』『九州文化史研究所紀要』第39号  
水島稔夫編 1984『伊倉遺跡』下関市教育委員会  
水島稔夫編 1990『綾羅木川下流域の地域開発史』下関市教育委員会  
村田多津江編 1985『吉母浜遺跡』下関市教育委員会  
安田喜憲 1980『環境考古学事始』日本放送出版協会  
八波浩一 1996『伝染浪出土遺物報告補遺、および若干の考察』『出光美術館研究紀要』第2号 出光美術館  
山口県 2000『山口県史 資料編 考古1』  
山口県教育委員会 1974『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』  
吉留秀敏 1994『環濠集落の成立とその背景』『古文化談叢』第33集 九州古文化研究会  
吉村次郎 1965『原始・古代』『下関市史 原始－中世』下関市史編修委員会  
李 純一 1996『中国上古出土楽器総論』文物出版社

原 始・古 代 年 表

西暦	中 国	韓 国	日 本
1000	1600頃～・殷建国 1050頃・周建国  770・春秋時代		縄文時代 (10000頃～)
500	450頃・戦国時代	青銅器時代	水田耕作伝来
400			弥生時代
300			
200	221・秦中国統一 202・前漢建国	初期鉄器時代	
前100		108・武帝(前漢) 楽浪ほか四郡設置	この頃、倭国は百余国に分立。 中国に渡航するものあり。 『漢書地理志』
100		原三国時代	
0	57・新羅建国 37・高句麗建国 18・百濟建国		
後100	8・新(王莽)建国 25・後漢建国		57・奴国王、後漢に朝貢 「漢委奴国王」金印下賜
200	220・三国時代(魏・吳・蜀)  265・魏滅亡、西晋建国 280・吳滅亡、西晋中国統一	205頃・帶方郡設置  三国時代	107・倭国王帥升ら、後漢 に朝貢  180頃・倭國大乱
300	316・西晋滅亡 (五胡十六国時代) 318・東晋建国	313・樂浪・帶方郡滅亡	239・卑弥呼、魏に遣使 248頃・卑弥呼死亡 古墳時代
400	420・東晋滅亡、宋建国 (南北朝時代)	400・高句麗、倭軍を破る 414・高句麗長寿王、広開土王碑 を建てる	372・肖古王(百濟)七支刀 を倭王に贈る
500	479・宋滅亡、齊建国  502・齊滅亡、梁建国		425・倭王讚、宋に遣使 438・倭王珍、〃 443・倭王済(允恭)、〃 462・倭王興(安康)、〃 478・倭王武(雄略)、〃
600	557・梁滅亡、陳建国 589・陳滅亡、隋中国統一  618・唐成立(～907)	562・伽耶滅亡	527・筑紫君磐井の乱 536・那の津(博多)に官家設置 538・百濟より仏教公伝 588・飛鳥寺の造営開始
700		660・百濟滅亡 663・倭水軍、白村江で大敗 668・高句麗滅亡	歴史時代 645・大化革新、難波宮遷都 672・壬申の乱 690・筑紫に大宰府設置 694・藤原京遷都
		統一新羅時代 (668～935)	710・平城京遷都

## 綾羅木郷遺跡への招待

発行日 2001年3月31日

発行 下関市立考古博物館

〒751-0866

山口県下関市大字綾羅木字岡454

TEL 0832-54-3061

FAX兼 0832-54-3062

印刷 泉菊印刷株式会社

